# 松川町の風土に根ざしたゆうき給食とどけ隊の挑戦

## ～里芋の魅力を引き出す土田芋栽培を例に～

○榊原健太朗1)・牛久保二三男2)・宮島公香2)・三木孝昭1)・岩石真嗣1)
1)（公財）自然農法国際研究開発センター、2) 松川町ゆうき給食とどけ隊

## 1．はじめに

行政や農家と一体となって有機農業を広げるための課題整理の1つとして、当センターが2019年末から松川町の技術的支援の取り組みから得られた興味深い事例を報告する。

## 2．ゆうき給食とどけ隊の取り組み

- 松川町が持続可能な地域づくりとして、200ha以上ある遊休農地対策を含め、農ある暮らしで健康な生活を目指して「松川町環境保全型農業推進協議会」の名称を「松川町ゆうきの里を育てよう連絡協議会」として立ち上げた。松川町ゆうき給食とどけ隊はその実働農家グループである。
- 松川町ゆうき給食とどけ隊が農薬や化学肥料に頼らず栽培。子供達においしく新鮮な地元野菜を食べてもらっている。

## （1）風土と地域資源の活用

- 松川町では、排水性の良い高台での果樹栽培、低地では稲作、それぞれ段丘面を活かした農業生産が展開。
- 地域資源であるリンゴ搾りかす・馬ふん・山の落ち葉等を活用した堆肥づくり、緑肥作やインセクタリープランツ導入、健康で多様な生態系を育てる土づくりを目指す
- 給食食材で需要が有り、作りやすい水稲や根菜類からはじめ、有機栽培が可能な地産・旬産の栽培品目を増やす。

## （2）里芋の逆さ植栽培＝土田芋栽培

- ニンジンを担当する、著者の一人、牛久保二三男氏は、新たな作物栽培に挑戦し、多品目栽培、多業種をこなす。
- 工夫をこらし無農薬栽培を成功させ、ケーブルテレビ菜園講座や取材受け入れ、SNS等を通し、情報を発信共有。
- 畑転換地で行う里芋の逆さ植栽培の工夫、土田芋栽培は「里」を逆さまにした牛久保氏のシャレ（図１）
- 信州でのサトイモ栽培の課題を解消し、楽しく、おいしく、簡単な農業の魅力が伝わる有機栽培の工夫

地元のテレビ局取材を受ける牛久保氏（右側）

図-1　土田いも栽培（苗）

## （3）里芋栽培の課題と工夫

①無霜期間短く越年保存困難
②水分過多は苗立ち不安定
③収穫期集中で供給過剰
④タネコストや収穫調整手間大

牛久保氏の工夫

**→親芋逆さ植・育苗**

①,②の初期生育確保、安定

**→ユンボ収穫土つき貯蔵後調整**

③需要増える正月出荷
④収穫調整コスト低減

**→断熱貯蔵庫保管**

④タネコスト低減

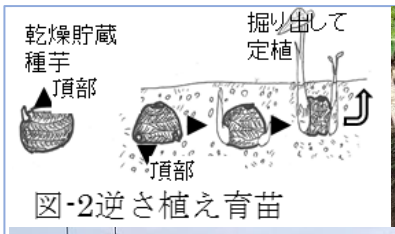


図-2逆さ植え育苗

## （4）松川町での里芋の逆さ植栽培の実際

①親芋の逆さ植で、ハウス内で土に伏せ抽葉させる（図-2）
②生分解性マルチに植え付け（図-3）
③マルチの上に土寄せし初期生育温度の確保と除草を簡略化
④葉が落ちた11月頃にユンボで株ごと掘り上げ収穫（図-3）
⑤そのままハウス内の穴の中に入れ保存⑥年明け徐々に乾燥
⑦芋の調整時間が短縮（図-4）⑧味も良く、正月に売れる
⑨親芋は上端茎葉と下端根を切断、乾かし傷口をコルク化（図-4）0℃以上を保つ地下室保管、厳寒期を越冬
⑩親芋・種芋で低コストで作付面積を増加

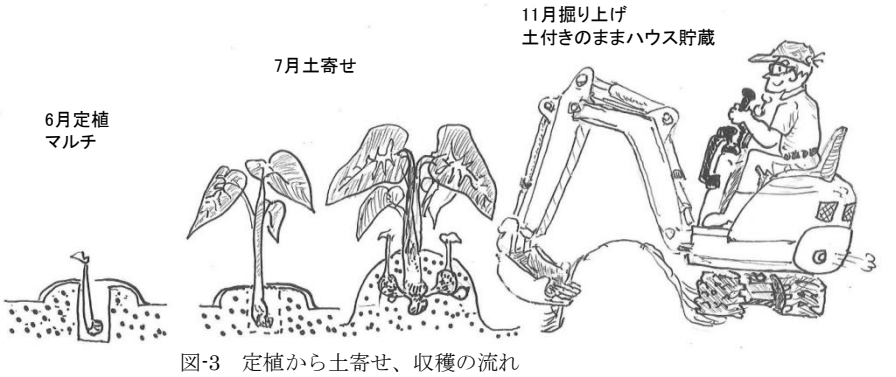


図-3　定植から土寄せ、収穫の流れ

## 3．まとめ

- ネーミングも併せ、消費者を喜ばせる工夫。自然の生産力を活かし続けるほど収益が上がる農業生産。作物特性を活かし、耕種法や保管調整の省力化を紹介した。有機農業経営を安定させるには、旧くからの既存技術や機械を取り入れ応用する風土に合わせた職人技・上手な運転技能を含む生産技術とともに、出荷・販売や流通の効率化、ＳＮＳや情報発信など雨天や農閑期の働きなどにもトータルに着目したい。
- 中山間地域の持続的生産や地域づくりには、行政・住民の理解による地元給食や産直などの地場を中心とした農産物と有機物、お金の地域内流通が重要。
- 有機農業者が多くの仲間と支え合い協力し、地域農業の課題を解決するグループ化と地域へ展開。周りの人達を助け、自らの後継者を育てる指導、発信力。核となる農家の工夫の横展開等がポイント。

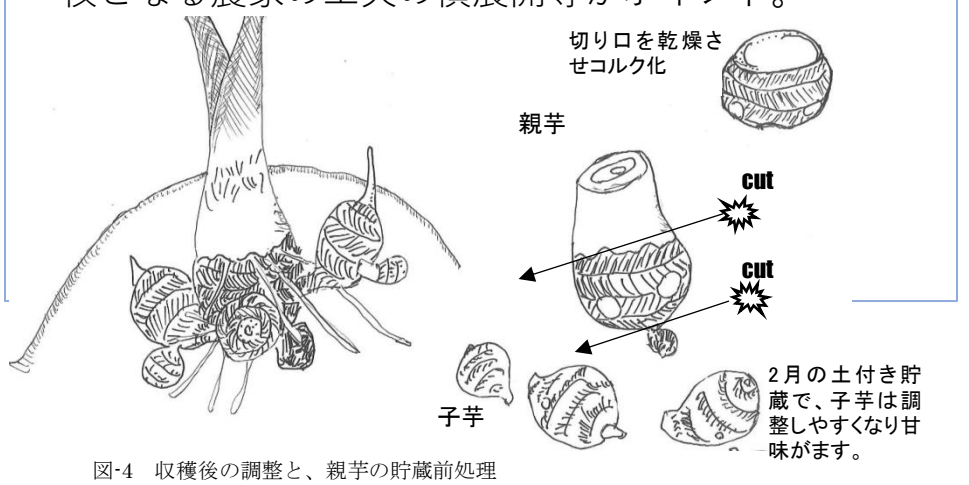


図-4　収穫後の調整と、親芋の貯蔵前処理